

## 2019 年度日本語教育学会 学会賞 受賞コメント

トムソン木下千尋（ニューサウスウェールズ大学・日本研究課程教授）

この度は日本語教育学会賞をいただき、大変嬉しく思います。これまでの受賞コメントには、受賞を聞いて驚いたというものが多のですが、やっともらえることになって良かったというのが私の正直な感想でした。というのも、何年も前から、オーストラリアには是非この賞を持ってきたいという仲間の先生方の熱意で、毎年推薦されていたのです。オーストラリアゆかりの皆さん、根気よく書類を準備し続けてくださった先生方、長い間ありがとうございました。この賞は、チーム・オーストラリアでいただいた賞です。



オーストラリアでは、日本語は学校で一番人気の外国語で、十人に一人の子供たちが学んでいます。二〇年以上この状態なので、日本語をかじったことのある人は至る所にいます。世界的に見ても日本語学習者の人口比はオーストラリアが最大で、英語を国語とする国としては快挙だと思います。しかし、こういうオーストラリアの実情はあまり知られていません。オーストラリアには素晴らしい小中高の先生方が大勢いらして、画期的な試みが数多くなされています。小さい時から日本語を習って大学に入る学習者も多く、卒業後多様な分野で活躍しています。たとえ日々、日本語を使わない職業であっても、日本語学習体験が必ずや生かされていることでしょう。現在の健全な日豪関係は彼ら、彼女らが下支えしてくれていると思います。この機に、皆さんにオーストラリアの日本語教育に関心を持っていただけるとありがたいです。

オーストラリアの日本語教育は古くから社会言語学の土壌の上に積み上げられてきました。私もこの地で長く仕事をしてきて、ことばは社会や歴史と切り離せないものであると強く感じてきました。ことばは社会や歴史に影響され、また逆に影響を与え、それを媒介するのが人です。人がつながることでことばが生まれ、そのことばでまた人とつながります。日本語教育も学習者、教師、様々な支援者、そして日本語教育に関わるすべての人々がつながることで新しい関係が、新しいことばが生まれてくる場だと思います。

私がオーストラリアで日本語教育を続ける意義は、まず、オーストラリアの若者が日本語学習を通して他者理解、自己理解を深める手助けをすることです。オーストラリアの大学に数多くやってくるアジアからの留学生に、オーストラリアという第三の場で日本語を学んでもらい、新たな視点で日本を見つめてもらうことにも大きな意義があります。そして、オーストラリアは海外在留邦人の数が世界三位で、継承語として日本語を学ぶ子どもたちも多く、継承語教育に貢献することも重要です。さらに、海外体験を持つ次世代の日本語教育者を育てることも大切だと思います。日本の日本語教育に向けて海外から意見を発信できる、世界の日本語教育を俯瞰できる次世代の教育者の育成です。

受賞を契機に、心意気を新たに、私にできることをつないでいきたいと思います。ありがとうございました。

## 2019 年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

石澤徹（東京外国語大学大学院国際日本学研究院・准教授）

この度は日本語教育学会奨励賞を賜り、光栄に存じます。受賞のお知らせをいただいた時は率直に驚きましたが、同じ志を持つ仲間との取り組みを評価していただけたことを大変嬉しく思いました。これまで試行錯誤を繰り返してきた日々が積み重なり、このエピックな瞬間につながっているということに、改めて歩み続けることの尊さを実感しております。

私個人の研究も『語彙ドン!』も、日本語学習者の方々の日々の様子から着想を得ております。学習者をみることの大切さは、広島大学での学生時代に学んだことであり、私の日本語教育の基礎を形成して下さった諸先生方のお導きによるものだと感じております。

また、当時、できる限り裾野を広げるようにと促していただいたことが、結果的には『日本語教育への道しるべ』シリーズに携わることにも繋がったのだと思います。『道しるべ』シリーズには、坂本正先生のお声がけで参加させていただきました。坂本先生の、日本語教育を担う人々を優しいまなざしでお見守りになっているお姿から多くを学ばせていただいておりますが、その一つがネットワークを大切にすることであり、私にとっては「ことばと学びでつながるなかまの会（こまつなの会）」を作ることに繋がりました。こまつなの会は業界の友人たちとの「ゆるい」情報交換の場として始めたものですが、友人たちの存在は非常に刺激的で、「日々少しでも成長し、明日につなげる場を作りたい」という気持ちを共有できたことで、「日本語教育の夏フェス」を始めることができました。

以上の通り、今回栄えある賞をいただきましたのは、これまで出逢った学習者の皆さん、長年にわたって支えてくださった皆さま、そしてともに切磋琢磨し前に進んできた同志の方々のご縁のおかげです。皆さんのおことばや笑顔が心に火をともしてくださっています。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

今、新型コロナウイルス感染症は日本語学習者にも、そして日本語教育機関にも多大な影響を与えています。また、「日本語教育の推進に関する法律」の成立とともに、日本語教師の資格のあり方も大きく変わろうとしています。このような変化の中においても、日本語を学ぶ人がいること、そして、学び手とともに歩もうとする人がいることに変わりはありません。まずは一人の日本語教師としてこれまで以上に丁寧に学び手の姿を見つめ、自分に何ができるのかについて考え、実践と理論の両輪で取り組んでいきたいと存じます。そして、日本語学習・日本語教育にかかわる方々のために、さまざまなベクトルでさらに新しく踏み出し、日本語教育業界の発展と成熟に貢献できるよう精進してまいります。会員の皆さま、事務局の皆さま、これからも共に歩ませていただけましたら幸いです。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。これまでのすべての出逢いに感謝するとともに、これからの出逢いを楽しみにしております。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださいました日本語教育学会関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。



## 2019 年度日本語教育学会 功労賞 受賞コメント

佐久間勝彦（聖心女子大学・名誉教授）

久しぶりに学会から封書が届いたとき、術後療養生活に入った昨年退会手続きをしたはずなのに何か問題があったのだろうかといけげんに感じました。準備不足で飛び込んだ日本語教育の世界、能力不足で50年間近く苦労の連続だったことを告白しないわけにはいきません。“功”ではなしに“労”にすぎません。“功労賞”、もったいないことですが、“ご苦労さま”“お疲れさま”という意味で、ありがたくお受けすることにいたしました。



古い書類を整理していたら、私が初めて口頭発表をした「外国人のための日本語教育学会」大会の案内が出てきました。1971年9月17日とあります。会長が元京都大学総長鳥養利三郎先生の時代です。閉会の挨拶が鈴木忍先生、まさに“前史”といっておよいでしょう。

年寄りの回顧談は若い方々に退屈なものですが、これまでどんなことに取りくんできたかをとということです、少しお付き合いください。

上記の発表題目が「日本語教育の構造的モデル作成のための試論」で、配布資料の注には、自分でも理解できなかったはずの T.パーソンズやダーレンドルフの名があります。いかに私が恥知らずで場違いの人間だったかがわかり、汗顔の至りです。

学業を怠って時間を費やした“演劇ごっこ”の“後遺症”もあり、当時一般的だった教科書の「これは本です」的な日本語にまず“拒絶反応”を起こしました。その“反発”からでしょう、会話文に“ストーリー性”を求めるようになりました。最初の仕事が1972年の『Basic Japanese : a review text』（米加12大学連合日本研究センター）の会話文執筆、それが10年後には、「授賞理由」であげてくださったビデオ教材『ヤンさんと日本の人々』へつながっていきました。

“ストーリー性”は、その後も、韓国の高校用検定教科書『日本語上下』（1990）、中等教育用教科書『ハンガリー人のための日本語』（2002）、タイの中等教育用教科書『あきこと友だち』（2004）などと続きますが、いずれも会話文はその国の中等学校の生徒が主人公でした。こうした“現地寄り”の性格を増した教材開発に関わる活動は、楽しくて楽しくてしかたがありませんでした。

“楽しくて楽しくてしかたがない”で50年間を振り返ってすぐ胸がいっぱいになるのが、青年海外協力隊や国際交流基金から派遣された日本語教師の皆さんとの出会いです。海外で教えはじめて挫折し、そこから貴重なものを見つけて全力で尽力している方々から学ぶことはあまりにも多く、楽しくて楽しくてしかたがありませんでした。“現地寄りの教材開発”の楽しさも、そのひとつです。

学習者の数ひとつとっても、日本語教育は海外が“主”で、国内が“従”、このことは今後も変わらないはずですが、私たちは、日本を日本語教育の“総本山”のように感じてしまいがちです。

そんな問題意識から始まったのが、やはり「授賞理由」で触れてくださったミニ学会「海外日本語教育学会」です。そこに集う人やネットで参加してくださる人は決して多くはありませんが、日本語教育は“海外から学ぶ”ことが貴重だと考えている私にとって、その学会は“宝石箱”のようです。人生の大半を海外で日本語教師として過ごしている人、いつか海外で日本語を教えてみたいと思っている人、初めての協力隊員として東欧で活動した人、同じく初めての協力隊員としてモンゴルやウズベキスタンへ派遣された人、国際交流基金専門家として多くの国で尽力した人、任国での日本語教育活動を語る時今でも涙する人、アフリカ3カ国の日本語教育の立ち上げに携わった人、任国の方々との協働で自らの人生を変えた人、YouTubeにチャンネルを設けスーダンの昔話をスーダンの学生の日本語で教えてくれた人、40年近く前の「ヤンさんと日本の人々」を最近までバングラデシュで使ってくれた人、北京の“大平学校”で最年少の派遣専門家だった人、協力隊本部で技術顧問として文字通り机を並べた人、東京外国語大学や聖心女子大学で日本語教育を学んで海外の日本語教育に携わった人...

COVID-19後の世界、日本語教育は何が求められるのか、何ができそうなのか、私にはわかりませんが、優先度の高いところに、“日本のファンを増やすこと”、“日本のプレゼンスを高めること”などのないことは明らかでしょう。今後日本語教育に携わるとくに若い方々に、やはり、永遠の努力目標として、単なるスローガンではない“学習者本位”や“現地本位”を期待し、「受賞コメント」を終えたいと思います。“功労賞”、本当に、ありがとうございました。

## 2019 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

ビアルケ(當山)千咲 (東京経済大学・特任講師)、柴山真琴 (大妻女子大学・教授)  
高橋 登 (大阪教育大学・教授)、池上摩希子 (早稲田大学・教授)

この度は、日本語教育学会「論文賞」を賜り、大変に光栄に存じます。受賞論文の研究内容に加えて、研究体制と研究姿勢も評価して下さった講評を拝読し、大変に嬉しく有難く存じました。

本論文は、共著者をメンバーとする科研費共同研究(研究代表者:柴山)の10年間の協働的活動による成果の1つです。本研究は、1)国際児のバイリテラシー形成過程を「共同行為論」の立場から質的に解明する事例研究と2)継承日本語学習児の作文力の発達過程の解明を目指す作文研究を両輪として進めてきました。特に作文研究では、「小学校国語学習指導書」の検討を踏まえて作文課題(「物語文課題」と「説明文課題」)を設定し、児童期の作文力を包括的に評価するために「総合的な作文評価法」(①文字・表記・単語/②構文/③談話から構成)も独自に開発しました。本論文で使用した作文データは、事例研究の対象児と作文研究の対象児(継承日本語学習児・日本語母語児)に同一課題で作文を書いてもらい、6年の歳月をかけて地道に蓄積してきたものです。

海外の継承日本語教育機関は、親や有志などが自身の時間と労力を投入し、限られた財源をやりくりする努力によって成り立っており、教師は子ども達の日本語力格差に対応する授業に奮闘しています。子ども達も学年が上がるほど現地校の学習の負担が増える一方で、日本語力の伸び悩みもあって、日本語学習の継続は容易ではありません。継承日本語学習児にとって、文章を書くことは特に負担の重い活動であり、優勢言語で表現できることが日本語では難しいというもどかしさを伴うものです。私達は、このような現場の苦労を目の当たりにして、子ども達の日本語力を様々な角度から解明し、支援につなげたいと考えて研究を行ってきました。

本研究を通して、対象とした独日国際児が言語の境界を越え、あらゆる力を駆使して日本語の文章を書いている様子が見えてきました。対象児の日本語作文には語彙力や文法力が反映され、特有の弱さもありますが、高学年になると伸びてきたドイツ語による思考力も支えにして日本語作文を書くようになるようです。継承日本語学習児が日本語で考え表現する力は、日本語だけに焦点を当ててではなく、日本語以外の言語の力や資源、それらを使う力にも注目すべきであることが示唆されます。子ども達がつこうとした力を認め活かしていくことは、新たな形で日本語学習への動機づけや自己効力感を高める教育実践へのヒントを含んでいるように思います。同様の発想は、多様な言語的文化的背景をもつ子ども達にも拡張できるかもしれません。

本研究は独日国際児を対象としましたが、今後は異なる二言語の組み合わせの継承日本語学習児の言語能力の発達過程を解明し、得られた知見を指導や支援に役立てられるよう一層努力していきたいと思っております。日本語教育の領域においては、独日国際児以外にも多様な言語的文化的背景をもつ年少学習者への対応が求められています。そうした子ども達への評価や支援に関して、知見の共有ができましたら幸いです。



# 2019年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

浜田麻里（京都教育大学・教授）

このたび2019年度「学会活動貢献賞」を受賞させていただくこととなりました。このような賞をいただくこと、身に余る栄誉と受け止めています。

日本語教育学会の会員となってからもうかなり長い年月になりますが、前半は本務をこなすので精一杯だったこともあり、学会においては大変「不熱心な」会員でした。学会というのはめざましい研究業績を挙げ続ける選ばれた人達が活動されている場所で、自分からすれば雲の上のこと、というのが正直な意識だったと思います。

ちょうど15年ほど前、右も左もわからないながらも大会委員会に加えていただくことになり、それが本当の意味での会員生活のスタートでした。

以来、大会委員のほかに、評議員、審査・運営協力員、国際大会の実行委員、常任理事などを担当させていただいてきました。いずれも学会の事業を裏方として支える、いわば「シャドウ・ワーク」です。学会がこうなったらいいなという思いはみなさんがお持ちだと思いますが、実際にそれを形にしていくには、こまごまとした実務も含め、企画し、実行し、それを継続していくための多大なエネルギーが必要になります。また、研究活動とは異なり、何も問題なくうまく進行しているのが当たり前で、大過なく終えられたからといってそのことを賞賛されたりすることもなく、一方でもし何かあったら責を問われるという類の仕事です。ただ、これらの仕事を通じて会員の未来に続く道が少しでも広がったり、新しい一步を踏み出そうとするその背中を押すことができたりするのではないかと、そのことに魅力を感じ、会員生活の後半はこれらの活動に携わってきました。

数年前に創設されたこの賞が、なかなか光の当たらないシャドウ・ワークに携わってきた人達を顕彰するものであるということはずばらしいことだと思います。自分自身がこの賞に値するような貢献を本当にできているかと自分に問い直してみると反省することばかりですが、こういった活動を着実にやり遂げてこられた先輩方に続きその末席に加えていただけることは、何よりも名誉なことだと感じています。

この間、学会での活動を通じて多くの方々と出会うことができたことも私にとっての大きな財産です。本学会のすばらしいところは、「お友達」が集まって作った会ではなく、「日本語教育」の専門家集団という一点でつながった多様な人々が集う場になっているところだと思います。私自身も様々な立場の方々とお仕事をさせていただくことによって、たくさんの方のことを学ばせていただきました。一緒に活動してきた皆様にもこの場をお借りして心から感謝したいと思いますし、またつねに委員の活動を支えてくださっている事務局の皆様にも御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

